



鼻歌まじりの命がけ

東京藝術大学
学長

宮田 亮平

学生：先生、4月8日、福島県に新しく開校した「県立ふたば未来学園高校」の開校式に参加されたとか。事故を起こした原発を抱える双葉群唯一の生徒募集で、先生は小泉進次郎復興大臣政務官の呼びかけに応じた「応援団」17人の1人なんですよ。宮田：そうそう。皮きりで挨拶することになったんだけど、並の挨拶じゃ面白くないだろ。だってこの高校は「前例なき環境には前例なき教育」がキャッチフレーズなんだから。

学：いったい何をやらかしたんですか？

宮：まず東京藝大卒業式で名物の“揮毫パフォーマンス”。特大キャンバスに「翔」の字を大書した後は、東京から連れてきた藝大生十数人からなるチンドン屋の登場だ。三味線、太鼓、笛、ラッパの音色に合わせて日本舞踊を舞いながら開場を練り歩いたら、一座に誘われた生徒や先生が踊りに加わって拍手と笑いで大盛り上がりでさ。いやウケたね。

学：先生、開校の目的は「震災と原発事故からの復興を支える人材の育成」ですよ。

宮：力が入ってるよね。だからここは「鼻歌まじりの命がけ」でやりたかった。

学：何ですか、それは？

宮：物事って頑張ろうとすると実力が発揮できない、逆に気楽にやると意外とうまくいくことってあるだろ。もちろん懸命にやるんだけど、のっけから命を懸けず軽いノリでいく。すっと力を抜いて威圧感なしにやると、意外と周りから多くを受け取れるんだよ。今の社会って全体的に力こぼが入っていて、一歩間違えたらヘッコンじゃうよね。そんな時代だからこそ「鼻歌まじりの命がけ」のノリを大事にしたいね。

学：でもそれって失敗するリスクがあるだけに勇気が要りますよね。

宮：うん、チンドン屋の藝大生も普段はお堅いクラシックをやってるんだから、被災地に入って子どもたちを乗せるなんて大変だったと思うよ。でも成功だけを求めずに、鼻歌まじりで一歩踏みだしてみようよ。やらなきゃ成功も失敗もないんだからね。

学：はい。ところでこのエッセー、「月刊資本市場」というまじめそうな雑誌に掲載されるんですよ。大丈夫ですか？

宮：大事なのは失敗したときに、それをちゃんと笑ってくれる周りの人々なんだ。もしコケたら君、必ず笑って受け止めてくれるよね。



開校式の様子